

令和3年度
国
語

(解答用紙は別紙としてこの冊子にはさんであります)

【一】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

私は、若い頃からいろいろな職人さんが仕事するところを見るのが好きで、邪魔をシヨウチで、黙っていつまでも見させてもらったりした。できあがった物を見るのもいいが、私のような素人には、その途中がおもしろい。包丁で魚をさばく、かなで木を削る、砥石で刃物を研ぐ、腕のいい職人の仕事は、みな本当にすばらしい。

私の家に、近頃は一人の大工さんが毎日来てくれている。ある建築会社をとおして家の改築を頼んだ。とてつもなく腕のいい人で、こういう大工さんが、今日本に何人いるかと思う。この人は、埼玉県の行田で工務店を営んでいる高橋茂さんという。高橋さんは、電動工具もたくさん使うが、かな、のみ、のこぎりを全く昔のやり方で使う。そうしなければできないところが、家のあちこちにある。

見ていると、本当に驚く。例えば、のこぎりの扱いだだが、杉の角材一本を切るのに、木を左手に、のこぎりを右手に持って、実になんでもなくヒヨイヒヨイと切る。その動作には、なんの習練もいらぬかのよう^aに。切られたダンメンを見てみると、ぞっとするほど滑らかに平らになっている。のこぎりで切ったようには、とうてい見えない。高橋さんによると、こういうことは、誰にも教えられるのだそうである。どうしてかという^bと、人の腕は一本ずつみな違っていて、その腕との相談^cでないと、のこぎりは引けない。もちろん、腕だけではない、体の全体がそうだろう。体と二本の腕、腕とのこぎり、のこぎりと木との相性、その全部がのこぎりの引き方を決める。切り口は、ほんの結果である。

A

これを、私がやるとなるとどうだろう。角材を台の上に据え、足で踏んづけて、のこぎりを引く。さんざん引いたあげく、切り口は曲がって、荒れ放題ということになる。高橋さんが角材を左手に持って、片手で^dのこぎりを引くのは、不精^eでしているのではない。両腕を動かして、木とのこぎりとの関係を不断に調整しながら切っているのである。切り口の驚いた平滑さは、こうした動きの全体から生み出されてくる。

B

もつといい話も聞けた。のこぎりを引くこつは、なんと^fいってもものこぎりの重さに従って、それに逆らわず引くことなのだそうである。腕が、体が、のこぎりに勝ってしまうようではいけない。そののこぎりだが、歯は限度まで薄くてペラペラになっている。素人が引けば数回で折れてしまうだろう。そういう物の重さを生かして切るという。のこぎりが、自分の重さで、自ら動いているかのように引く。これは何を意味しているか。木の中^gののこぎりが入り込んでいくのに、人間の不安定な意識ほど邪魔なものはない、ということだろう。腕の筋肉に命令するのは、その意識になる。筋肉がのこぎりの重さに勝っているかぎり、木の中には入り込めない。

X

、木を生かすことに負けるのである。

高橋さん愛用のこのぎりは、どこまでも軽い。その軽さから、いかに重みを引き出せるかが、木との勝負の分かれ目になる。高橋さんは六十五歳くらいだ
と思うが、実にみごとな体つきをしている。無駄なところが少しもなく、見るからにしなやかそうな筋肉が、さえた骨格を覆っている。 C

^④木との勝負、と言ったけれども、本当はそうではない。大工の仕事は木をやっつけることではない。木の中に入り込んで、その特質を引き出すことである。そのためこのぎりやかんながある。だから、こういう刃物は、狩りや戦^{いくさ}をする時の武器とは反対の性質を持っている。大工にだけ可能な木の理解や分類や愛し方というものが、それには鉄の道具がフカケツなのだろう。生身の体だけでは、だめである。そこで、あの極度^①に軽いこのぎりなんかが登場する。考えてみれば、このぎりのこの重さほど、大工の腕と木の間で微妙なはたらきをするものはない。 D

木で家を建てる技術は、人間の歴史の中でとても早い時期からもう頂点に達している。例えば、飛鳥時代に寺を建てた工人の技術は、今でも実際に寺へ行っ
て見るができる。その技術に達している大工は、鎌倉時代からこっちはもういないそうである。けれども、私はもつとはるかに古い時代の民家がどん
なふうであったかを考えてみる。掘っ立て小屋のような家屋^{かおく}は、決して浮かんでこない。丁寧^②に米を作り、麻を育てて機^{はた}を織っていた生活が、どうしてそん
な建築で満足していただろう。

衣、食、住の自給は、人が独立して暮らしていくための根本条件である。独立とは、どういうことか。他と争わず、他に依存せず、生活していける、とい
うことだろう。それなら、独立^⑤は平和の根本条件だと言っていることになるではないか。人間の共同体は、こうした独立のためには、なくてはならないもの
だ。衣、食、住の自給を目的としない共同体は、他と争い、他から奪うために組織されるしなくなる。

木を切つて家を建てる技術が、こんなにも深くにまでいったのは、その技術の目的がそもそも深いからである。木を育てて伐採^①し、家を建てて何代も住み、
最後には焼却する。焼却した土地の土からまた木を育てる。この悠久の循環は自然の中の何物も破壊しない。いや、自然の循環そのものになっている。米を
作り、機を織る昔の技術も同じである。

^⑥こうした自然の循環の中で、人の技術はほとんど限りなく深くなることができる。腕のいい大工は、現にそのことを、いやというほど示しているではない
か。深くなる、とはどういう意味だろう。物の表面を滑^{すべ}っていく私たちの日常生活が、物の隠された性質の中に入り込み、それを引き出し、生かすことに成
功していくことを言う。だから、これは私たちの命そのものが深くなっていくことと同じである。

問一 ― 線部④(ア)⑤(イ)のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直し、それぞれ解答欄に答えなさい。

問二 ― X に入る最も適当な言葉を次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

【ア 一方 イ しかし ウ 最後に エ つまり】

問三 ― 線部①とありますが、高橋さんの説明として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア とても力持ちの大工さんで、筋肉質でバランスのとれた骨格をしており、若く見える。
イ とても器用な大工さんで、のこぎりを使ってミリ単位の細かな作業を丁寧に仕上げる。
ウ とても腕のいい大工さんで、のこぎりなど昔ながらの工具と一体化して作業を進める。
エ とても若い大工さんで、どんな木材でものこぎりを使って鮮やかに切ることができる。

問四 ― 線部②とありますが、ここで用いられている表現技法と同じものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア 子供がギャーギャー騒ぐ。 イ お母さんがニコニコ笑う。
ウ 手の指をバキバキ鳴らす。 エ お菓子をボリボリ食べる。

問五 ― 線部③とありますが、その理由を筆者はどのように考えていますか。解答欄に記号で答えなさい。

ア のこぎりを引く技術は、誰にも教えたくないほど、一生懸命に努力して習得したものであるから。
イ 人間はそれぞれ体格が異なっており、腕のかたちや力量によってのこぎりの引き方が変わるから。
ウ 感性や感覚によってのこぎりの引き方も異なるので、他人にうまく説明することができないから。
エ のこぎりを扱うことは、筋力が重要になってくるため、腕が太ければ太い方が上手く引けるから。

問六 —— 線部④とありますが、筆者は大工の仕事をどのようなことだと考えていますか。それにあたる部分を本文中から二十字程度で抜き出して答えなさい。

問七 本文中には次の一文が抜けています。この文が入る最も適当な部分を本文中の から選び、解答欄に記号で答えなさい。

【これは、全てを木と腕とのつながりの中でやってきた人の全く自然な体つきである。】

問八 —— 線部⑤とありますが、なぜそのように言えるのですか。その説明を本文中の語句を用いて四十字程度で解答欄に答えなさい。

問九 —— 線部⑥とありますが、「限りなく深くなる」とはどのようなことを言っていますか。その説明として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

-
- ア 自然環境を保ちながら、最新技術を取り入れ生活すること。
 - イ 森林伐採をすることなく、木造住宅を建築していくこと。
 - ウ 自然と共生しながら、自給自足の生活を送っていくこと。
 - エ 自然破壊のない循環の中で、資材を有効利用していくこと。
-

【二】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

三月の下旬。北陸の城下町にある宿に親子が訪れる。口数も少なく笑顔のない二人に、宿の従業員は心中しんじゅうを凶るのではないかと心配する。翌朝、親子は行き先も告げずに外出し、従業員の不安は募もつるばかりである。以下は、それに続く場面である。

親子は、約束どおり日暮れ前に帰ってきたが、それを玄関に出迎えて、思わず、あ、と驚きの声をもらしてしまった。母親は出かけたときのままだったが、息子のほうは、髪を短く伸ばしていた頭がすっかり丸められて、雲水うんすいのように青々としていたからである。

あまりの思いがけなさに、ただ目をみはっていると、

「まんず、こういうことになりやんして……やっぱし風がしみると見えて、くしゃみを、はや三度もしました。」

母親は、仕方なさそうに笑って息子をかえりみた。息子のほうはにこりともせずうつつむいて、これまた仕方がないというふうふうに青い頭をゆるく左右に振っている。どうやら、どちらも納得なとくずくの剃髪ていはつらしく、

「なんとまあ、涼しげな頭におなりで。」

と、ようやく声を上げてから、ふと、宿泊カードに光林寺内とあったのを思い出した。

「それじゃ、こちらがお坊さんに……?」

「へえ、雲水になりますんで。明日から、ここの大本山に入門するんでやんす。」

母親は目をしばたたきながらそう言った。

それで、この親子にまつわる謎がいちどに解けた。大本山、というのは、ここからバスで半時間ほどの山中にある曹洞宗*2の名高い古刹*3で、毎年春先になると、そこへ入門を志す若い雲水たちが墨染めの衣装で集まってくる。この少年もそのひとりひとりで、北のはずれから母親に付き添われてはるばる修行にきたのである。

それにしても、頭を丸めた少年は、前にも増してなにか痛々しいほど可憐かれんに見えた。さつき青々とした頭に気づいたとき、まるで雲水うんすいのような、とは思ったものの、本物の雲水になるための剃髪だとは思っても及ばなかったのは、そのせいだが、母親によると、得度*4さえまかせていれば中学卒で入門が許されるという。

けれども、この大本山での修行は峻烈しんれつを極めると聞いている。果たしてこのオサナb少年に耐えられるだろうか、他人事ながらはらはらして、「でも……お母さんとしてはなにかとご心配でしょうねえ。」
と言うと、

② 「なに、こう見えても芯の強い子ですからに、なんとかこらえてくれましょう。父親も見守ってくれています。」
母親は珍しく力んだ口調で、息子にも、自分にもいい聞かせるようにそう言った。

——息子が湯を使っている間、帳場ちやうばで母親に茶を出すと、問わず語りにこんなことを話してくれた。自分は寺の梵妻ぼんさいだが、おとしの暮れ近くに、夫の住職が交通事故で亡くなった。夫は、四、五年前から、遠い檀家だんかの法事に出かけるときはジテンシヤcを使っていたが、町のセールスマンの口車くぐるまに③乗せられてスクーターに乗り換えたのがまずかった。凍いてついた峠道で、スリッパしたところを大型トラックにはねられてしまった。

跡継ぎの息子はすでに得度をすませていたが、まだ中学二年生である。仕方なく、町にあるおなじ宗派の寺にオウエン①を仰いでなんとか急場をしのいできたが、出費もかさむし、いつまでも住職のいない寺では困るといふ檀家の声も高まって、一刻も早く息子を住職に仕立てないわけにはいなくなった。住職になるには、大本山で三年以上、ほかに本科一年間の修行を積み重ねなければならない。ゆくゆくは高校からしかるべき大学へ進学させるつもりだったが、もはやそんな悠長なことは言っていられない。十五で修行に出すのはかわいそうだが、仕方がなかった。

自分は明日、息子が入門するのを見届けたら、すぐ帰郷する。入門後は百日、面会はできないというが、里心がつくといけないから面会などせず、郷里で寺を守りながら、息子がおよそ五年間の修行を終えて帰ってくるのを待つつもりでいる……。

④ 「それじゃ、息子さんは今夜で娑婆しよばとは当分のお別れですね。お夕食はうんとごちそうしましょう。なにが大好きかしら。」
そうきくと、母親は即座に、

「んたら、とんかつにしてくださいゃんす。」
と言った。

「とんかつ……そんなものでよろしいんですか？」

「へえ。あの子は、寺育ちのくせに、どういふものかとんかつが大好物でやんして……。」

母親は、はにかむように笑いながらそう言った。

だから、夕食には、これまででいちばん厚いとんかつをじっくりと揚げて出した。しばらくすると、給仕の女中が降りてきて、

「お二人は、しんみり食べてますよ。今のぞいてみたら、お母さんの皿はもう空っぽで、お子さんのほうはまだ食べてます。お母さんは箸を置いて、お子さんがせつせと食べるのを黙って見てるんです。」

と言った。

それから一年近くたった翌年の二月、母親だけが一人でひょっこり訪ねてきた。面会などしないと強気^eでいても、やはり、いちど顔を見ずにはいられなくなったのだらうと思ったが、そうではなかった。修行中の息子が、雪作務^{*9}のとき僧坊の屋根から雪といっしょに転落し、右脚を骨折して、今は市内の病院に入院しているのだという。

「もう歩けるふうでやんすが、どういうことになっているやらと思ひましてなあ。」

相変わらず地味な和装の、小髻^{*10}に白いものが目につくようになった母親は、決して面会ではなく、ただちよつと見舞^fい^fにきただけだと言った。

息子の手紙には、病院にきてはいけない、夕方六時に去年の宿で待っているようにとあつたと言うから、

「じゃ、お夕食はごいっしょですね。でも、去年とは違いますから、なにをお出しすればいいのかしら。」

「さあ……修行中の身ですからなあ。したが、やっぱし……。」

「わかりました。お任せください。」

と引き下がって、女中にとんかつの用意を言いつけた。

夕方六時きっかりに、衣姿の雲水が玄関に立った。びっくりした。わずか一年足らずの間に、顔からも体つきからも可憐さがすっかり消えて、見違えるような凍^りとした僧になつている。去年、人前では口をつぐんだままだった彼は、思いがけなく鍊^{*11}れた太い声で、

「おひさしぶりです。その節はお世話になりました。」

と言った。それから、調理場から漂ってくる好物の匂いに気づいたらしく、ふと目を和^をませて、こちらを見た。⁵

「……よろしかったでしょうか。」

彼は無言で合掌の礼をすると、右脚をすこし引きずるようにしながら、母親の待つ二階へゆっくり階段を昇っていった。

- | | | | | | | | |
|------|----|-------------------------|---------------------------|------|----|----------------------------|-------------------------|
| * 1 | —— | 剃髮 <small>ていはつ</small> | 髪をそること。 | * 2 | —— | 曹洞宗 <small>そうどうしゅう</small> | 禅宗の一派。福井県にある永平寺を大本山とする。 |
| * 3 | —— | 古刹 <small>こさつ</small> | 古い寺 | * 4 | —— | 得度 <small>とくと</small> | 出家すること。 |
| * 5 | —— | 峻烈 <small>しゅんれつ</small> | 厳しくはげしいこと。 | * 6 | —— | 梵妻 <small>ぼんさい</small> | 僧侶の妻 |
| * 7 | —— | 檀家 <small>だんか</small> | 一定の寺院に布施をする家 | * 8 | —— | 娑婆 <small>しゃば</small> | 俗世間 |
| * 9 | —— | 雪作務 <small>ゆきざむ</small> | 作務は禅寺で僧が行う労務。寺で行う除雪作業をいう。 | * 10 | —— | 小鬢 <small>こびん</small> | 頭の左右側面の髪 |
| * 11 | —— | 鍊れた太い声 <small>ね</small> | きたえられた太い声 | | | | |

問一 —— 線部①～⑥のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直し、それぞれ解答欄に答えなさい。

問二 …… 線部について、本文中に六か所出てくる「雲水」という言葉は、どのような意味ですか。解答欄に答えなさい。

問三 —— 線部①とありますが、「この親子にまつわる謎」とは何であったのですか。四十字以内で解答欄に説明しなさい。

問四 —— 線部②とありますが、ここには「母親」のどのような気持ちが含まれていますか。最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

-
- ア 息子以上に、我が子を入門させる自分自身のほうが辛いことを理解してくれるよう願っている。
- イ まだ中学生の我が子を、厳しい修行に入門させることへの辛さや心配を自ら抑えようとしている。
- ウ 仕方なく入門させてしまう息子への罪悪感があり、夫が死んだからだと自分に言い聞かせている。
- エ これから一人で暮らすことに耐えきれなくなり、寂しさを理解してほしいと気弱になっている。
-

問五 ——— 線部③とありますが、「口車に乗せられる」の意味を次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア うわべばかりの言い訳を受け入れること。 イ 相手のうまい言い回しにだまされること。

ウ 何でも口に出されて傷ついてしまうこと。 エ 乱暴な言葉に嫌な思いをさせられること。

問六 ——— 線部④とありますが、ここから「母親」のどのような心情がわかりますか。「〜という気持ち」に続くように解答欄に説明しなさい。

問七 ——— 線部⑤とありますが、この動作から「少年」のどのような様子がわかりますか。最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

ア 屋根から足を骨折したことで、久しぶりに母親に会えることがうれしくて心が弾んでいる。

イ 一年ぶりに、おいしかった大好物のとんかつをまた食べられることを、心から喜んでいる。

ウ 宿の人が好物を用意してくれている心遣いこころづかいに感謝し、その好意に心が穏やかになっている。

エ 一年ぶりに訪れた宿の人たちが、好物のとんかつを準備してしてくれたことに驚いている。

【三】次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① つれづれなる折、昔の人の文（前に人からもらった）見出でたるは、ただその折の心地して、いみじくうれしくこそおぼゆれ。（あたかもそれを受け取った時の気持ちにして）
（とてもうれしく）
（思われる）

まして亡き人などの書きたるものなど見るは、いみじくあはれに、歲月の多く積もりたるも、
（しみじみと趣があつて）
（多くの年月が過ぎ去っているのに）

ただいま筆うちぬらして書きたるやうなるこそかへすがへすめでたけれ。なにごともしもたださし向かひたるほど
（今実際に筆をしめらせて書いてある）
（本当に）
（面と向かいあっている間の）

の情ばかりにてこそ侍るに、これはただ昔ながらつゆ変はることなきもいとめでたきことなり。
（交際だけで長続きしないのに）
（昔のまま）
（少しも変わらないのも）

（出典 『無名草子』より）

問一 —— 線部①「つれづれなる折」の言葉の意味として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

【ア 悲しい時 イ 退屈な時 ウ 腹立たしい時 エ 楽しい時】

問二 —— 線部②、③を現代かなづかいに直し、ひらがなで解答欄に答えなさい。

問三 —— 線部④「めでたけれ」とありますが、この時の心情として最も適当なものを次の中から選び、解答欄に記号で答えなさい。

【ア 素晴らしいと思う イ 喜ばしいと思う ウ 楽しいと思う エ 残念に思う】

問四 —— 線部⑤「これ」が指している内容を、本文中から一字で抜き出して解答欄に答えなさい。

問五 —— 線部⑥とありますが、筆者が「いとめでたきことなり」と考える理由として適切な部分を本文中から十五字で抜き出し、解答欄に答えなさい。

